

見られ方の違いと親密度および 自己呈示欲求が対人不安に及ぼす影響

小林 祐子

I. 問題と目的

対人的な交流や人前で感じる不安は対人不安 (social anxiety) と呼ばれ、その生起要因については、これまでさまざまな観点から研究がされている。Higgins (1987) は自己認知の観点から、その生起要因を考え、自己不一致理論 (self-discrepancy theory) を提唱した。ここでは「自己の側面 (現実自己・義務自己)」と「自己認知する際の視点 (own・other)」との組み合わせから、現実/own と義務/other の不一致の大きさが対人不安に影響を及ぼすことが示された。つまり、現実の自己像と他者からのこうあるべきと見られている姿としての自己像の不一致の大きさが対人不安に影響するとしている。そして、現実自己と義務自己の不一致の大きさと対人不安の関連についての自己不一致理論の追試や考察がされてきたが、必ずしも仮説を支持するものばかりではなかった (例えば小平, 1999; 工藤, 1990)。ただ、これらの追試や研究では理想自己や義務自己といった「自己認知」の側面の不一致にのみ注目され、「自己認知する際の視点」における不一致状態についてはあまり論じられていない。

そして、「自己認知の側面」よりも、「自己認知する際の視点 (standpoint)」に注目し、不一致状態と対人不安との関連をみたものに Sanchez-Bernardos & Sanz (1992) の研究がある。彼らは、「他者が自分をどのように見ていると思うか」という“社会自己”を新たに概念化し、社会自己-理想自己 (own) の不一致が大きい群は、差が小さい群や中くらいの群に比べて、対人不安を呈しやすいということを見出した。

Higgins (1987) と Sanchez-Bernardos & Sanz (1992) の不安を喚起する要因として、「自己の視点 (own)」と「他者の視点 (other)」の不一致が存在していることが共通している。対人不安という他者の存在による不安を扱う場合には、「自己の視点」以外に「他者の

視点」をどのように認知しているのかを扱うことが必要な条件であるといえる。

1. 不安喚起対象としての他者

Higgins (1987) は不安を喚起する対象を「重要な他者」と特定している。一方, Sanchez-Bernardos & Sanz (1992) の社会自己は「社会的状況での自己」とされ、その対象は特定されていない。つまり、「不特定の社会的状況での他者」ということになる。角尾 (2003) は、他者一般に対する不安得点と特定の他者に対する不安得点の差異得点がマイナスからプラスまでの値をとることを示し、これらの不安が区別しうることを示した。そこで本研究では、親しさの程度の両極として「友人」と「不特定他者」を取り上げ、他者の違いによる特徴を明確化する。

また、相手が違うことにより不安が喚起される状況はどのように異なるのか明確にされていない。そこで、本研究では Sanchez-Bernardos & Sanz (1992) と同様に、自己認知の側面として理想自己を取り上げる。そして、理想自己に対する自分自身の自己認知 (現実自己) と他者の視点での自己認知 (社会自己) がどのような関係となった場合に不安が喚起されるのか、不一致状態と対人不安との関連を検討することを目的とする。

2. 不安内容

日本でいう「対人不安」は DSM の疾病診断など欧米では、「社会的不安 (Social Anxiety)」や「社会恐怖 (Social Phobia)」という対人場面を含めた社会的状況で経験される不安として扱われている。そして、このような社会恐怖患者の中核には“他者の否定的評価への懸念”があると考えられ、石川 (1992) は高対人不安者に評価懸念が有意に高くあることを示した。しかし、このほか、対人不安にはさまざまな内容が含まれ、シャイネス、対人緊張、人見知り、また、特定場面として会食不安やスピーチ不安などがある。つま

り、対人不安をどのような観点から捉えるかによって、測定される対人不安の側面は異なると考えられる。

本研究では、“理想自己”、“現実自己”、自己内における他者の視点として“社会自己(友人/不特定他者)”の3つの視点的在り方から、不安を喚起する状況の違いを設定するが、その状況の違いによって喚起される不安の内容も異なると考えられる。そこで、それぞれの不一致状態での不安内容の違いを明確にすることを目的とする。それぞれの不一致状態の違いから喚起される不安として、「ネガティブな評価を受けることに対する懸念や不安」である「評価不安」、他者の面前で話をしたり、自己呈示をする際に生じる不安やプレッシャーである「発言不安」、さらに、不特定他者に対しては「恥や気おくれといった感情に代表されるような対人的接触状況での緊張感」である「対人緊張」を加え、これら内容の異なる3つの不安を扱うこととする。

3. 自己呈示欲求—「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」—

Leary(1990)は、「特定の自己イメージを与えたい」という自己呈示欲求と「他者から良い評価を受ける自信」という自己呈示の効力感の2要因のバランスから、対人不安が高まる状況を考えて。佐々木ら(2001)は、Learyの自己呈示欲求を「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」の2つに分け、これら2つの欲求と対人不安との関連を見た。その結果、対人不安を高めるのは「拒否回避欲求」であって、「賞賛獲得欲求」はむしろ不安を抑制するように働くことが示された。

賞賛獲得欲求は、ポジティブな評価への期待であり、この欲求が不安を喚起する状況を想定すると、良く見られたい、賞賛を受けたいという気持ちが強い一方で、賞賛される可能性が低い状況で、うまく自己呈示できるかどうかという不安が高まると考えられる。つまり、見られたい自己像(理想自己)と他者からの見られ方(社会自己)の不一致状態で賞賛獲得欲求があることが不安を高める要因として働くのではないだろうか。

そこで、本研究では“理想自己”と“社会自己”との不一致状態、および、「拒否回避欲求」、「賞賛獲得欲求」との関連が対人不安に及ぼす影響を探ることを第2の目的とする。

4. 本研究の目的

1. 他者の違いと standpoint の不一致状態との関連から、引き起こされる不安内容の違いを検討する。
2. 見られ方の違いにより、拒否回避欲求、賞賛獲得欲求が別の形で不安と関連しているかどうかを検討する。

自己の側面について、理想自己、現実自己、社会自己(友人/不特定他者)の3つの視点的それぞれがどういった関係にあるかを捉え、その特徴からの不安を測定する。なお、社会自己における“友人”と“不特定他者”は分けて分析することとする。

まず、友人に対しては、もうすでに友人関係が成り立っているため、その時点でもうすでに受け入れられている気持ちは強くあるはずである。そのため、友人に理想的に見られなくとも、不安は感じないであろう。しかし、友人からは理想像として認知されているが、自分自身は理想とはかけ離れていると感じている場合、これから継続して関係を持つ中で、相手が思う理想的な自分とは違う自己が露呈した場合に、相手はそれを受け入れてくれるだろうか、否定的な評価を得てしまうのではないかという不安が起こるだろう。このことから、自分自身の捉え方に反して、友人に理想的に見られていると感じている場合には「評価不安」が高まると考えられる。また、逆に、自分自身は理想的であると認知しているのに、友人からはそう見られていないと感じている場合には、友人に理想的である自分について、もっと自分の良さを分かってもらいたいと思うであろう。そして、何か発言したり、自己呈示する際に、うまく良い点が印象づけられるか、失敗してしまうかもしれないというプレッシャーが高まるだろう。つまり、自分自身は理想像として認知している一方、友人はそう見ていないと感じている場合には「発言不安」が高まると考えられる。

次に、相手を不特定の他者とした場合、相手はほとんど関わりのない一見的な相手であり、そういった相手から受け入れられるかどうかは、友人に対するほど重要な要因ではなく、むしろ、理想像として見られないことが不安や緊張を生む事態であることが想像できる。このことから、相手に理想像からは遠い自己像として見られ、かつ、その認知が正確であると感じることで、理想から離れた自己が露呈して恥ずかしいという感情としての不安である「対人緊張」が高まると考えられる。

また、友人の場合同様に、自分自身は理想的である

と捉えているのに、相手からはそう見られていないと感じている場合には、その人に対して、理想的である自分について、その姿を示したいと思うであろうし、自分自身が理想像に当てはまっていると確認するためには、他者からも認められることを望むであろう。一度きりしか関わらない一見の相手には、その場でうまく自己呈示できない限り、その後には訂正することはできない。このことから、発言したり自己呈示する際の不安である「発言不安」は高まると考えられる。

さらに、自己呈示欲求それぞれとの関連において、拒否回避欲求は拒否されたくないという気持ちで、そこには他者から拒否され、ネガティブな評価を受けることで、ネガティブな自分に直面することに対する怖れがあると考えられる。たとえ、相手から理想像に見られていると感じていても、その相手から、拒否されたり批判されることは、理想像を否定され、新たにネガティブな自己に直面させられることになる。このことから、見られ方に関わらず、拒否回避欲求は評価不安を高める要因として働くと考えられる。

次に、賞賛獲得欲求は良い評価を得たいという欲求であり、ポジティブな評価に対する期待がある。相手から理想から離れた姿で認知されていると感じている場合に、賞賛獲得欲求が高くあることで、理想像としての良い評価が得られるか、また、良い点をうまくアピールできるだろうかというプレッシャーが高まることが予想される。よって、これらは「評価不安」および「発言不安」を高める要因として働くと考えられる。

仮説

1. 相手が友人のとき、現実自己－社会自己に不一致がある場合に不安が高まる。不一致の違いによって喚起される不安の内容は以下の通りである。
 - 1-1. 理想自己と社会自己との不一致が小さく、現実自己と社会自己との不一致が大きい状態にある場合に評価不安が高まる。
 - 1-2. 理想自己と社会自己との不一致が大きく、現実自己と社会自己との不一致も大きい状態にある場合に発言不安が高まる。
2. 相手が不特定他者のとき、理想自己－社会自己に不一致がある場合に不安が高まる。不一致の違いにより喚起される不安の内容は以下の通りである。
 - 2-1. 理想自己と社会自己との不一致が大きく、現実自己と社会自己との不一致は小さい状態にある場合に対人的緊張が高まる。

2-2. 理想自己と社会自己との不一致が大きく、現実自己と社会自己との不一致も大きい状態にある場合に発言不安が高まる。

3. 相手が友人、不特定他者の場合ともに、理想自己と社会自己の不一致の大きさにかかわらず、拒否回避欲求が高いほど、評価不安、発言不安が高まる。
4. 相手が友人、不特定他者の場合ともに、理想自己と社会自己の不一致が大きく、賞賛獲得欲求が高いほど評価不安、発言不安が高まる。

Ⅱ. 方 法

対象

地方私立大学の学生 395 名（男性 90 名、女性 305 名）。平成 18 年 8 月に個人配布、集団法により質問紙調査を実施した。

質問紙

(1) 自己認知

①自己認知の側面の選出

和田（1996）による Big Five 尺度 60 項目のうち、ポジティブ語を表す形容詞を選出、社会的望ましさを考慮してポジティブ語として表現されるように直し（例えば「自己中心的な」→「自己中心的でない」）、36 項目を使用した（付表 1）。このうち、被調査者にとって重要な項目 10 項目を選んでもらった。

②理想自己の測定

選んだ各項目について「なりたい」、「なりたくない」を選択、どの程度なりたいか、理想とする程度を 0 “全く違う”～10 “非常にそうだ”の 11 段階で回答を求めた。なお、「なりたくない」と選択した項目については逆転項目とみなし、各側面の得点を逆転として処理した。

③現実自己の測定

選んだ各項目について、各項目の表す人物に、どの程度当てはまるか 0 “全く当てはまらない”～10 “非常に当てはまる”の 11 段階で回答を求めた。

④社会自己の測定

友人：選んだ各項目について、友人からはどの程度に見られていると思うか、0 “全く当てはまらない”～10 “非常に当てはまる”の 11 段階で回答を求めた。「友人」に対しては、「会うことが多く、自分にとって重要な友人ひとり」を思い浮かべて回答してもらった。

不特定他者：「友人」同様、各項目について一般にどの程度に見られていると思うか、0～10 の 11 段階

で回答を求めた。

(2) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

小島・太田・菅原(2003)による尺度で、「賞賛獲得欲求」因子、「拒否回避欲求」因子各9項目について“当てはまらない”～“当てはまる”の5件法で回答を求めた。

(3) 対人不安

不安喚起対象別に2つに分けて回答を求めた。1つは相手が、自己認知の側面で回答する際に想定してもらった「友人」の場合、もう一方は「面識のない不特定の人物」として教示を与え、回答を求めた。なお、「友人」の場合、集団場面での質問項目には思い浮かべた相手を含む友人同士を想定してもらった。

使用尺度は辻(1993)により開発された不安因子10因子のうち「評価不安」因子、「対人的緊張」因子、「発言不安」因子を使用した。ここで、「発言不安」は3項目と少なく、項目を補うため、毛利・丹野(2001)による状況別対人不安尺度の「発言・発表不安」因子を採用し、合わせて11項目を「発言不安」に採用し、“当てはまらない”～“当てはまる”の5件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結 果

不一致得点

理想自己、現実自己、および社会自己(友人または不特定他者)との各側面の不一致の算出法は以下の方法で行った。

不一致得点 $D = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^n di^2}{n}}$ (個々の項目における差異を di , n は項目数) として算出し、得点は各自己像との不一致が小さければ値は小さく、不一致が大きければ値が大きくなることを意味している。本研究では、各項目について、はじめに「なりたい」か「なりたくない」を選択してもらい、つづいて理想とする程度を答えてもらった。このため、自分自身の理想とする程度よりも現実自己が超えている場合、たとえば「明るい」のは良いが、自分は明るすぎると思っている場合

には、「なりたくない」と選択できるようにし、逆転項目として処理した。しかし、「なりたい」と選択しながらも、理想自己得点から現実自己得点を引いた値が負である場合が見られた。このときの差異は1～2点であり、この場合、現実自己は理想自己と一致しているものと見なした。それぞれの不一致得点は表1に示す。

表記方法として理想自己と現実自己の不一致を D_{i-a} と略記する。そして、理想自己と、友人および不特定他者との不一致をそれぞれ D_{i-f} , D_{i-g} , さらに現実自己との不一致をそれぞれ D_{a-f} , D_{a-g} と略記することとする。

尺度の構成

1. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

既定どおり「賞賛獲得欲求」因子、「拒否回避欲求」因子の2因子を抽出した。

2. 対人不安

①友人

因子分析(主因子法, パリマックス回転)により、ほぼ規定の因子どおり、「評価不安」, 「発言不安」の2因子を抽出した(累積寄与率53.48%)。ただ、本来、発言不安項目である「どもらないかと不安である」は、評価不安因子に.40以上で負荷し、これを評価不安因子として採用した。また、両方の因子に.40以上負荷した項目については、既定の因子の項目として採用した。その結果、評価不安12項目、発言不安9項目の計21項目で採用した(付表2-1参照)。

②不特定他者

因子分析(主因子法, エカマックス回転)により、「発言不安」, 「評価不安」, 「対人緊張」の3因子を抽出した(累積寄与率52.60%)。「人前で話さねばならないと思うとそれだけで恐ろしい」など、本来、対人緊張因子の項目であるが、発言不安因子に.40以上で負荷していた。これらの項目について、項目内容を考慮し、発言不安と考えられるものについては「発言不安」因子に採用した。また、2つ以上の因子に.40以上負荷しているものは、既定の因子に採用した(付表2-2参照)。その結果、「発言不安」13項目、「評価不安」11項目、「対人緊張」11項目の計35項目とした。

表1 不一致得点における平均と標準偏差

	平均	SD
D_{i-a}	3.77	1.48
D_{a-f}	2.07	1.12
D_{i-f}	3.36	1.32
D_{a-g}	1.73	0.91
D_{i-g}	3.73	1.38

自己認知と対人不安との関連

親密度の違いによる不安に与える影響の大きさを比較、検討するため、重回帰分析により分析を行い、 D_{i-f} , D_{a-f} , または D_{i-g} , D_{a-g} の交互作用項を入れることで、理想自己、現実自己、および他者からの見られ方

表 3-1 友人における各変数間の相関係数

	D _a	D _{a-f}	D _{i-f}	D _{a-f} ×D _{i-f}	評価不安	発言不安
D _a	1.00					
D _{a-f}	0.38**	1.00				
D _{i-f}	0.68**	0.08	1.00			
D _{a-f} ×D _{i-f}	-0.32**	-0.13*	0.00	1.00		
評価不安	0.27**	0.11*	0.10*	-0.20**	1.00	
発言不安	0.23**	0.03	0.11*	-0.14**	0.48**	1.00

**p<.01, *p<.05

表 3-2 不特定他者における各変数の相関係数

	D _a	D _{a-g}	D _{i-g}	D _{a-g} ×D _{i-g}	評価不安	発言不安	対人緊張
D _a	1.00						
D _{a-g}	0.20**	1.00					
D _{i-g}	0.77**	0.10*	1.00				
D _{a-f} ×D _{i-g}	-0.15**	0.09	0.02	1.00			
評価不安	0.22**	-0.02	0.18**	-0.11*	1.00		
発言不安	0.20**	-0.08	0.13*	-0.08	0.60**	1.00	
対人緊張	0.30**	-0.05	0.20**	-0.10*	0.67**	0.81**	1.00

**p<.01, *p<.05

の不一致状態の違いが不安に与える影響を比較した。

1. 対人不安と不一致得点との相関

D_{i-f}, D_{a-f}, ならびに D_{i-f} と D_{a-f} の交互作用項 (以下 D_{i-f}×D_{a-f}) と友人に対する評価不安, 発言不安との相関係数, D_{i-g}, D_{a-g}, ならびに D_{i-g} と D_{a-g} の交互作用項 (以下 D_{i-g}×D_{a-g}) と不特定他者に対する評価不安, 発言不安, 対人緊張との相関係数を算出した (表 3-1, 3-2 参照)。

友人に対する評価不安, 発言不安において, D_{i-f}, D_{a-f}, D_{i-f}×D_{a-f} との相関は低く, ほとんど違いは見られなかった。

不特定他者に対する不安においても同様に, 評価不安, 発言不安, 対人緊張のいずれの場合も, D_{i-g}, D_{a-g} や D_{i-g}×D_{a-g} との相関は低く, ほとんど違いは見られなかった。

2. 自己認知と対人不安における重回帰分析

友人に対する評価不安, 発言不安を従属変数として, D_{i-f}, D_{a-f}, ならびに D_{i-f}×D_{a-f} を独立変数とする重回帰分析を行った (表 4-1 参照)。また, 不特定他者も同様に, 評価不安, 発言不安, 対人緊張を従属変数として, D_{i-g}, D_{a-g}, ならびに D_{i-g}×D_{a-g} を独立変数とした重回帰分析を行った (表 4-1 参照)。

なお, 相関係数を含め, 交互作用項と各変数における多重共線性の危険を低減するため, 各変数を Z 変換し, 交互作用項は積によって算出した後, D_{i-f}, D_{a-f}, D_{i-f}×D_{a-f} および D_{i-g}, D_{a-g}, D_{i-g}×D_{a-g} の変数の分析を行った。

表 4-1 それぞれの不安における重回帰分析 (標準偏回帰係数)

	予測変数	評価不安	発言不安	対人緊張
友人	D _{a-f}	.078	.001	
	D _{i-f}	.097*	.110*	
	D _{a-f} ×D _{i-f}	-.186**	-.135**	
	重相関係数(R)	.235	.175	
不特定他者	重決定係数(R ²)	.055	.031	
	F 値	7.592**	4.100**	
	D _{a-g}	-.025	-.091	-.062
	D _{i-g}	.188**	.135**	.269**
不特定他者	D _{a-g} ×D _{i-g}	-.108*	-.074	-.097*
	重相関係数(R)	.216	.175	.234
	重決定係数(R ²)	.046	.031	.055
	F 値	6.348**	4.100**	7.530**

**p<.01, *p<.05

①友人

重決定係数 (R²) は全て 1% 水準で有意であった。ただ, その値はどれも低く, この点から不安に与える影響は小さいといえる。

評価不安, 発言不安ともに交互作用項が有意であった (表 4-1)。よって, D_{i-f} 得点が低水準, 中程度, 高水準それぞれの場合で, 不安を予測する D_{a-f} 得点の単回帰式は異なる。そこで, 評価不安, 発言不安それぞれについて D_{i-f} 得点が -1 SD, 平均, +1 SD の場合の単回帰直線を求めた (図 1-1, 2-1 参照)。続いて, これらの各単回帰直線の傾きの有意性を検討するため単純傾斜の検定を行ったところ, D_{i-f} 得点の -1 SD の傾きが有意であった (表 4-2)。このことから, D_{i-f} 不

表 4-2 D_{i-f} における単純傾斜の検定結果

D_{i-f}	評価不安	t 値	発言不安	t 値
+1 SD	-.118	-1.536	-.142	-1.823
M	.078	1.577	.001	0.023
-1 SD	.275	4.065**	.144	2.105*

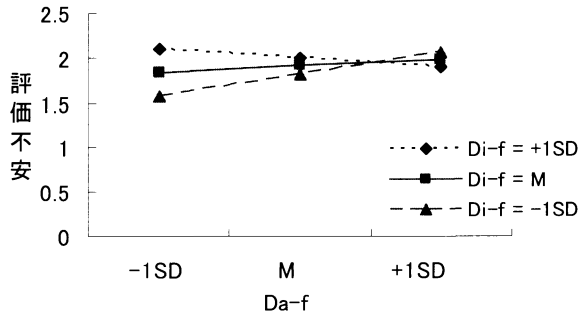


図 1-1 評価不安における D_{i-f} の単純傾斜

表 4-3 D_{a-f} における単純傾斜の検定結果

D_{a-f}	評価不安	t 値	発言不安	t 値
+1 SD	-.099	-1.382	-.033	-0.452
M	.097	1.965*	.110	2.199*
-1 SD	.293	4.059**	.253	3.452**

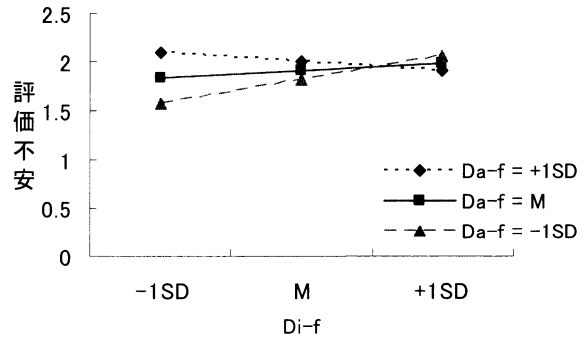


図 1-2 評価不安における D_{a-f} の単純傾斜

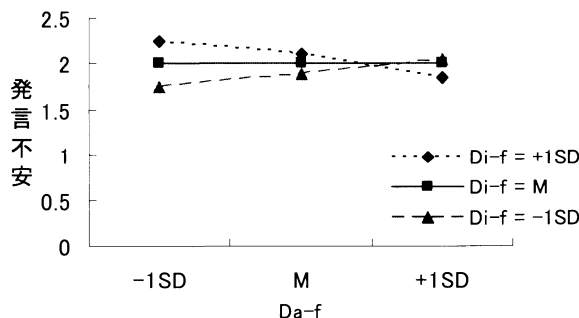


図 2-1 発言不安における D_{i-f} の単純傾斜

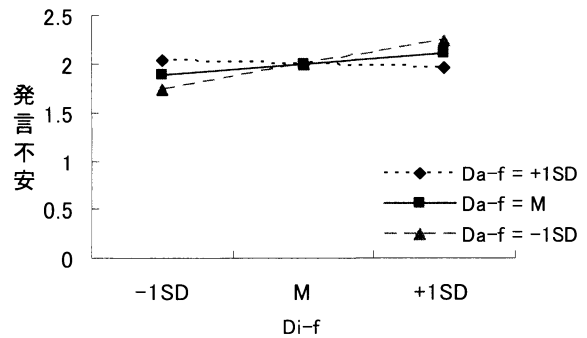


図 2-2 発言不安における D_{a-f} の単純傾斜

一致低 - D_{a-f} 不一致低よりも D_{i-f} 不一致低 - D_{a-f} 不一致高のほうが評価不安, 発言不安ともに高まることが示された。この結果から, 友人の場合, よく見られすぎていると感じることで評価不安が高まることが示され, 仮説 1-1 は支持された。ただ, 評価不安だけでなく, 発言不安も同様に引き起こされ, よく見られすぎていると感じる状況で何らかの発言をする際にも不安が高まることが示された。

また, D_{i-f} 得点の場合と同様に, 評価不安, 発言不安それぞれについて D_{a-f} 得点が -1 SD, 平均, +1 SD の場合の単回帰直線を求めた。そして, 各直線の単純傾斜の検定を行ったところ, 表 4-3 に示すとおり, D_{a-f} 得点が -1 SD の傾きで有意であった (図 1-2, 2-2 参照)。なお, D_{a-f} 得点の M の傾きは D_{i-f} 得点の主効果を示している。

このことから, D_{i-f} 不一致低 - D_{a-f} 不一致低よりも D_{i-f} 不一致高 - D_{a-f} 不一致低のほうが評価不安, 発言不安ともに高まるといえる。つまり, 友人に理想とは異なる姿ありのままに認知されていると感じる状況で

不安が高まることが示された。

また, D_{i-f} 不一致高 - D_{a-f} 不一致高ではどの条件とも差は見られず, 仮説 1-2 は支持されなかった。

②不特定他者

次に, 不特定他者に対する不安について, 重決定係数 (R^2) は 1% 水準で有意であったが, 友人の場合同様, 低い値を示し, 不安に与える影響は小さいといえる。

評価不安, 対人緊張の交互作用項が有意であり, 発言不安は D_{i-g} 得点の大きさが正の影響を与えるだけであった (表 4-1 参照)。そこで, 対人緊張, 評価不安それぞれにおいて D_{i-g} 得点が -1 SD, 平均, +1 SD の場合の単回帰直線を求め, 各直線における単純傾斜の検定を行ったところ, 友人に対する不安とは逆に, D_{i-g} 得点が +1 SD の傾きが有意であった (図 3-1, 4-1)。結果は表 4-4 に示す。このことから, 不特定他者に対する不安において, D_{i-g} 不一致高 - D_{a-g} 不一致高よりも, D_{i-g} 不一致高 - D_{a-g} 不一致低の場合に対人緊張, 評価不安ともに高まることが示された。

表 4-4 D_{i-g} における単純傾斜の検定結果

D_{i-g}	評価不安	t 値	対人緊張	t 値
+1 SD	-.131	-1.968*	-.157	-2.374*
M	-.025	-.505	-.062	-1.251
-1 SD	.080	1.107	.032	0.449

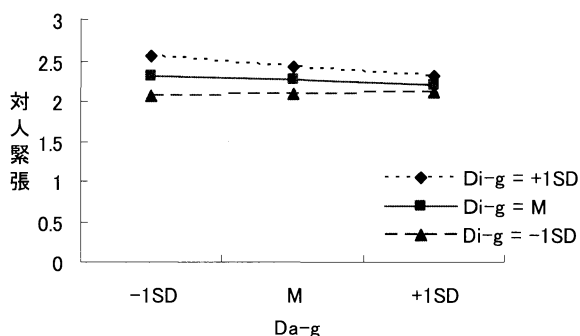


図 3-1 対人緊張における D_{i-g} の単純傾斜

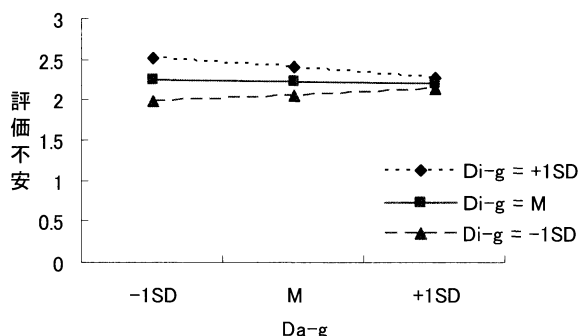


図 4-1 評価不安における D_{i-g} の単純傾斜

表 4-5 D_{a-g} における単純傾斜の検定結果

D_{a-g}	評価不安	t 値	対人緊張	t 値
+1 SD	.082	1.195	.114	1.661
M	.188	3.784*	.209	4.223**
-1 SD	.293	4.217**	.303	4.378**

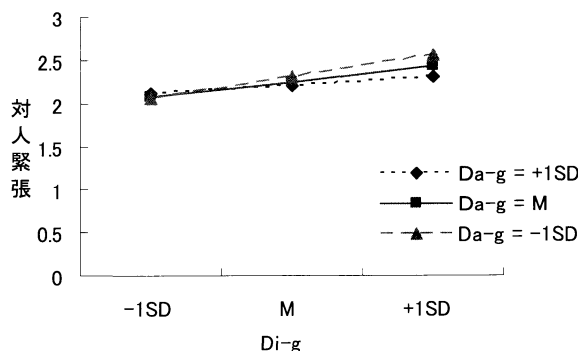


図 3-2 対人緊張における D_{a-g} の単純傾斜

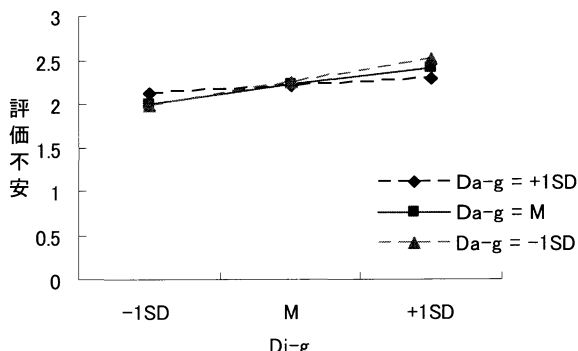


図 4-2 評価不安における D_{a-g} の単純傾斜

また、対人緊張、評価不安それぞれについて、 D_{a-g} 得点の単純傾斜の検定を行ったところ、表 4-5 に示すとおり、友人の場合同様に D_{a-g} 得点が -1 SD の傾きで有意であった (図 3-2, 図 4-2 参照)。

このことから、 D_{i-g} 不一致低 - D_{a-g} 不一致低よりも D_{i-g} 不一致高 - D_{a-g} 不一致低のほうが対人緊張、評価不安ともに高まる。以上の結果から、理想とは離れた姿を正確に認知されていると感じることで対人緊張が高まることが示され、仮説 2-1 は支持された。

また、仮説 2-2 について、 D_{i-g} 不一致高 - D_{a-g} 不一致高で不安は喚起されず、自分では理想像として捉えている一方で他者からはそうは見られていないと感じる場合に不安が高まるとは言えないことが示された。

自己認知及び欲求と対人不安との関連

理想と他者からの見られ方、および欲求との関連が不安に及ぼす影響を検討するため、 D_{i-f} および D_{i-g} と自己呈示欲求 (拒否回避欲求 / 賞賛獲得欲求) がそれぞれの不安に影響するか、友人、不特定他者につい

て、これらの交互作用項を用いて重回帰分析を行った。分析は前回と同様 Z 変換した後に行った。

1. 対人不安と不一致得点及び欲求との相関

まず、友人、不特定他者それぞれについて、各変数間の相関係数を表 5-1, 5-2 に示した。

友人への評価不安、発言不安ともに、 D_{i-f} や交互作用項 (以下 $D_{i-f} \times$ 拒否回避欲求) に比べ、拒否回避欲求との相関が高かった。また、賞賛獲得欲求や交互作用項 (以下 $D_{i-g} \times$ 賞賛獲得欲求) と評価不安、発言不安との相関はいずれも低かった。

不特定他者への評価不安、発言不安ともに、 D_{i-g} や交互作用項 (以下 $D_{i-g} \times$ 拒否回避欲求) に比べ、拒否回避欲求との相関が高かった。賞賛獲得欲求は、評価不安、発言不安ともに相関は低く、交互作用項 (以下 $D_{i-g} \times$ 賞賛獲得欲求) に相関は見られなかった。

2. 自己認知及び欲求と対人不安における重回帰分析

友人、不特定他者について、評価不安、発言不安を従属変数として D_{i-f} (または D_{i-g}) 得点と拒否回避欲求得点、これらの交互作用項 ($D_{i-f} \times$ 拒否回避欲求, D_{i-g}

表 5-1 友人における見られ方, 自己呈示欲求と不安との相関係数

	D_{if}	賞賛	$D_{if} \times$ 賞賛	拒否回避	$D_{if} \times$ 拒否	評価不安	発言不安
D_{if}	1.00						
賞賛獲得	-0.01	1.00					
$D_{if} \times$ 賞賛	0.20**	0.04	1.00				
拒否回避	-0.00	0.14**	0.08	1.00			
$D_{if} \times$ 拒否	0.03	0.08	0.20**	0.06	1.00		
評価不安	0.10*	0.20**	0.14**	0.47**	0.05	1.00	
発言不安	0.11*	-0.12**	0.07	0.41**	-0.00	0.48**	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$

表 5-2 不特定他者における見られ方, 自己呈示欲求と不安との相関係数

	D_{ig}	賞賛	$D_{ig} \times$ 賞賛	拒否回避	$D_{ig} \times$ 拒否	評価不安	発言不安
D_{ig}	1.00						
賞賛獲得	-0.09	1.00					
$D_{ig} \times$ 賞賛	0.03	-0.01	1.00				
拒否回避	0.07	0.14**	0.03	1.00			
$D_{ig} \times$ 拒否	0.02	0.03	0.08	0.06	1.00		
評価不安	0.18**	0.14**	0.07	0.60**	0.01	1.00	
発言不安	0.13**	-0.16**	0.03	0.47**	-0.03	0.60**	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$

表 5-3 見られ方と拒否回避欲求の各不安に対する重回帰分析 (標準偏回帰係数)

	予測変数	評価不安	発言不安
友	D_{if}	.105*	.113
	拒否回避欲求	.464**	.407**
	$D_{if} \times$ 拒否回避	.015	-.032
人	重相関係数(R)	.477	.421
	重決定係数(R ²)	.228	.178
F 値		38.387**	28.136**
不特定他者	D_{ig}	.143**	.094*
	拒否回避欲求	.595**	.467**
	$D_{ig} \times$ 拒否回避	-.031	-.059
人	重相関係数(R)	.621	.482
	重決定係数(R ²)	.385	.233
F 値		81.616**	39.537**

** $p < .01$, * $p < .05$

表 5-4 見られ方と賞賛獲得欲求の各不安に対する重回帰分析 (標準偏回帰係数)

	予測変数	評価不安	発言不安
友	D_{if}	.085	.097
	賞賛獲得欲求	.198**	-.121*
	$D_{if} \times$ 賞賛獲得	.111*	.059
人	重相関係数(R)	.252	.172
	重決定係数(R ²)	.063	.030
F 値		8.827**	3.963**
不特定他者	D_{ig}	.196**	.110*
	賞賛獲得欲求	.159**	-.145**
	$D_{ig} \times$ 賞賛獲得	.069	.022
人	重相関係数(R)	.252	.192
	重決定係数(R ²)	.063	.037
F 値		8.817**	4.998**

** $p < .01$, * $p < .05$

×拒否回避欲求)を独立変数として投入し, 重回帰分析を行った(表 5-3 参照)。

その結果, 評価不安, 発言不安ともに, $D_{if} \times$ 拒否回避欲求および $D_{ig} \times$ 拒否回避欲求の偏回帰係数は有意ではなかった。そして, 表 5-3 に示すとおり, D_{if} , または D_{ig} 得点および拒否回避欲求得点がそれぞれ不安に対して正の影響を与えていた。このことから, 友人, 不特定他者ともに, 拒否回避欲求は見られ方に関わらず, 不安の喚起に影響を与えており, 仮説 3 は支持された。

賞賛獲得欲求についても同様に, 友人, 不特定他者の評価不安, 発言不安それぞれを従属変数として D_{if}

(または D_{ig}) 得点と賞賛獲得欲求得点, これらの交互作用項 ($D_{if} \times$ 賞賛獲得欲求, $D_{ig} \times$ 賞賛獲得欲求)を独立変数として投入し, 重回帰分析を行った。その結果, 友人に対する評価不安で $D_{if} \times$ 賞賛獲得欲求の偏回帰係数が有意であった(表 5-4 参照)。

そこで, 友人における評価不安の交互作用項 ($D_{if} \times$ 賞賛獲得欲求)について, 賞賛獲得欲求得点が-1 SD, 平均, +1 SD の場合の単回帰直線を求めた。そして, 各直線の単純傾斜の検定を行ったところ, 表 5-5 に示すとおり, +1 SD の傾きが有意であった(図 5-1 参照)。

このことから, 友人において, D_{if} 不一致低-賞賛

表 5-5 賞賛獲得欲求得点における単純傾斜の検定結果

賞賛獲得欲求	評価不安	t 値
+1 SD	.192	3.087**
M	.085	1.700
-1 SD	-.002	-.292

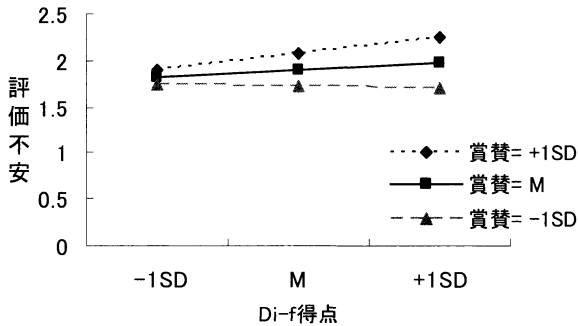


図 5-1 評価不安における賞賛獲得欲求得点の単純傾斜

表 5-6 D_{if} 得点における単純傾斜の検定結果

D_{if}	評価不安	t 値
+1 SD	.305	4.516**
M	.198	4.040**
-1 SD	.091	1.292

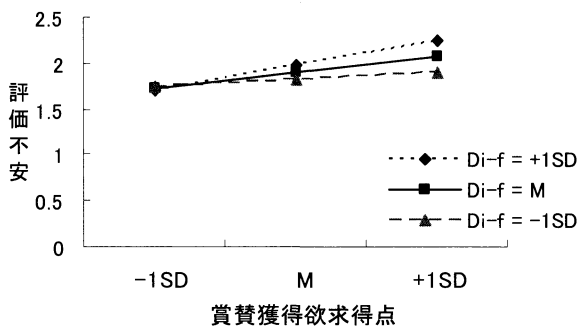


図 5-2 評価不安における D_{if} 得点の単純傾斜

獲得欲求得点高よりも高一高の場合に評価不安が高まるといえる。

また、 D_{if} 得点の単純傾斜の検定を行ったところ、表 5-6 に示すとおり、 D_{if} 得点が +1 SD の傾きが有意であった (図 5-2 参照)。

このことから、友人に対して、 D_{if} 不一致高 - 賞賛獲得欲求得点低の場合よりも高一高の場合に、評価不安が高まるといえる。以上の結果より、友人に対して、理想像とは見られていないと感じ、さらに賞賛獲得欲求が強くあることで評価不安が高まり、仮説 4 は友人に対する評価不安のみ支持された。

IV. 考 察

1. 親密度の違いによる対人不安への影響

重回帰分析の結果から、友人の場合、 D_{af} の大きさだけが不安に影響するとは言えなかった。つまり、友人から正確に認知されていないと感じていても、それだけで不安は高まらないことが示された。また、不特定他者の場合に D_{ig} の大きさが不安に正の影響を与えており、この結果は仮説 2 を支持したものであるが、友人に対しても同様の結果が得られ、この点から親密度による違いを示すことはできなかった。

そして、 D_{af} 、 D_{ag} の単純傾斜の結果から、友人、不特定他者ともに、 D_{if} 不一致高 - D_{af} 不一致低 (不特定他者の場合 D_{ig} 不一致高 - D_{ag} 不一致低) のほうが、低-低の場合よりも不安が高くあることが共通して見られた。つまり、友人、不特定他者ともに、理想像とは違う姿ありのままに認知されていると感じている場合に、不安が高まることがわかった。

理想と離れた姿として正確に認知されていると感じる状況で対人緊張が引き起こされており、仮説 2-1 は支持されたと言えるが、この状況では同時に評価不安も引き起こされ、特異的に「緊張」を起こすわけではなかった。このことは以下のように考察する。相手から正確に認知されていると感じている状態であれば、その他者から受ける評価は、正確な評価として当てはまると考えられる。そのため、友人であれ、不特定他者であれ、相手からのネガティブな評価を懸念するような評価不安が高まるのではないだろうか。

次に、親密度の違いにより異なる点について述べていく。まず、発言不安について、友人には D_{if} 不一致低 - D_{af} 不一致高の状況で不安が喚起されたが、不特定他者には、 D_{ig} 得点の効果のみが正の影響を与えていた。つまり、友人には、理想像と違う姿ありのままに認知されていると感じる場合に発言不安が高まる一方で、不特定他者には実際の自分がどうであれ、理想像と見られているかということのみが発言不安を引き起こす要因として働いていた。

また、親密度の違いで差異が表れた点として、友人では D_{if} の -1 SD の傾斜が有意であった一方で、不特定他者では D_{ig} の +1 SD の傾斜が有意であった。このことから、不特定他者には、理想像とは異なる姿ありのままに捉えられる状況で不安が高まる一方で、友人には、理想像として見られていても、それが実際の自分とは異なる、つまり、良く見られすぎていると

感じることで不安が高まることが示された。この状況での不安喚起は、相手が友人の場合のみである。不特定他者に不安を喚起する状況では、友人にも同様に不安を喚起しており、この結果と合わせて考えると、友人には、不特定他者に不安を感じるのと同じ状況以外に、新たに別の不安喚起状況が存在すると言える。このような、“良く見られすぎる”という状況は、その裏に“評価が下がる”可能性を含んでおり、不特定の見知らぬ他者という一見的な関係でなく、継続的な関係を持つ友人や身近な人物であるからこそ不安を引き起こす状況であるといえる。

賞賛場面での不安や羞恥という現象は、他者に肯定的な良い姿として呈示できているにもかかわらず不安が喚起され、自己呈示理論での説明とは一致しない現象であると言われてきた(菅原, 1998)。そして、菅原(2004)は羞恥の発生要因として、他者からの賞賛場面での恥ずかしさを説明する“期待裏切りモデル”を考案している。このモデルでは、賞賛場面が他者からの期待に自己がついていけないことへの不安と考え、過大な期待を裏切ってしまうような自分の姿を恥じたり、不安を抱くものと説明している。本研究での結果も“過大な期待を裏切る危険性”により、否定的な評価を得るかもしれないという不安が喚起されるという点で、このモデルを支持するものであった。ところが、この現象は“友人”にのみ起こったものであり、不特定他者には当てはまらなかった。このことから、この状況での不安喚起には“過大な期待を裏切る危険性”だけでなく、本人に「期待に応えたい」という気持ちがあることが推測される。

2. 不一致状況と対人不安

重回帰分析の結果、友人での $D_{i,r}$ 不一致高 - $D_{s,r}$ 不一致高、また、不特定他者での $D_{i,g}$ 不一致高 - $D_{s,g}$ 不一致高において、各条件との差は認められず、仮説1-2, 2-2は支持されなかった。この点については、条件設定上の問題があると考えられる。例えば相手が友人の場合、表1の平均とSDからすると、 $D_{i,r}$ 不一致高 - $D_{s,r}$ 不一致高のとき、 $D_{i,g}$ 不一致高が小さい被験者以外に $D_{i,g}$ 不一致高が $D_{i,r}$ 不一致高よりも大きい条件となる被験者が含まれている可能性が考えられる。つまり、 $D_{i,r}$ 不一致高 - $D_{s,r}$ 不一致高の場合が必ずしも「自分自身では理想像と捉えている一方で、相手からはそのように見られていないと感じている場合」とは言えず、自己認知における被験者の特徴が統一されていない可能性が考えられる。そして、このことは、相

手が不特定他者の場合にも同様のことが言える。

3. 見られ方と自己呈示欲求との関連

賞賛獲得欲求について、重回帰分析の結果から、友人に対する評価不安においてのみ仮説4が支持され、不特定他者には、理想像として見られない状況と賞賛獲得欲求がそれぞれ単独で不安に影響していた。これは、相手が友人の場合、友人関係として相手との関係性が成立しているため、たとえ理想像に見られなくとも受け入れられており、それだけではネガティブな評価がされることは想定されていないためではないか。しかし、そこに賞賛獲得欲求が高くあることで不安が喚起されるのは、良い評価を得たいという気持ちが強まるほど、自分のことをよく知る友人に理想像として認めてもらえないことで、自己が理想とは異なることに直面させられたり、自己評価を低下させるような不安を喚起させる状況となると考えられる。

さらに、賞賛獲得欲求について、友人、不特定他者ともに、評価不安には不安を高める要因として働いていたのに対して、発言不安には賞賛獲得欲求が高くあることが、むしろ、不安を抑える要因として働くことが示された。このことは、以下のように考察する。発言不安は“人前で何かするときを生じる不安”であり、これから自分がどのように発言したり、自己呈示するかによって、その評価は肯定的にも否定的にもなりうる。そのため、賞賛獲得欲求が強くなることは、悪い評価を得る懸念よりも、良い評価を得る期待が強くなるため、発言状況で不安が抑制されるのではないか。

最後に、賞賛獲得欲求が高くあることで不安が高まるという結果は、これまでの研究結果とは異なるものであった。この点について、注意する点として対象者の問題がある。本研究の対象は大学生というアイデンティティ形成期であり、他者からの評価は、自己のアイデンティティ確立のために自分の一面として取り入れる重要な要因となる。そのため、他者からの賞賛が肯定的な自己を形成するのに大きな影響を与えることで、賞賛獲得欲求と不安との関連が見られた可能性も想像される。

4. 今後の課題

本研究では、社会自己を友人と不特定他者に分け、親密度の違いという点から、自己の見られ方と不安との関連を見たが、重回帰分析の結果は、どの状況も説明率、偏回帰係数はきわめて低い結果となった。その

ため、見られ方による影響は「影響がないとは言えない」という状況であり、対人不安を引き起こす要因として、見られ方以外の新たな変数を考慮に入れる必要があると言える。また、今回、理想自己として自己自身の中での理想像を測定した。しかし、見られ方による不安の喚起を推測する場合には、自己のなりた理想像よりも、「どのように見られたいか」という“見られたい理想像”としての理想自己との不一致状態が重要な要因として、不安に強く影響を与えると考えられる。

さらに、今回は親密度の違いの両極として「友人」と「不特定他者」を扱った。しかし、不安を喚起しやすい対象として笠原（1977）は“半知り”の相手に対して最も不安が高まると述べており、今回示された「不特定他者」と「友人」という両極の相手に対して不安を起こす状況や特徴の違いから、半知りの相手に最も不安が高まる要因を考えていくことが期待される。

引用文献

- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy theory: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340
- 石川利江・佐々木和義・福井 至 1992 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本語版標準化の試み 行動療法研究, 18(1), 10-17
- 笠原 嘉 1977 青年期 中公新書
- 小平英志 1999 諸自己像への accessibility と不快感情との関連—Self-discrepancy theory の枠組みから— 教育心理学論集, 28, 9-17
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11(2), 86-98
- 工藤恵理子 1990 現実自己, 理想自己, あるべき自己, なり得る自己とその達成感と抑鬱との関連について 日本心理学会第 54 回大会発表論文集, 186
- Leary, M. R. 1983 Understanding social anxiety: social, personality, and clinical perspectives. California: Sage (レアリー, M. R. 生和秀敏 (監訳) 1990 対人不安 北大路書房)
- 毛利伊吹・丹野義彦 2001 状況別対人不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究, 14(1), 23-31
- Sanchez-Bernardos, M. L., & Sanz, J 1992 Effects of the discrepancy between self-concepts on emotional adjustment. *Journal of Research in Personality*, 26, 303-318
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 2001 対人不安における自己呈示欲求について—賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から— 性格心理学研究, 9, 142-143
- 菅原健介 1991 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, 7(1), 19-28
- 菅原健介 1998 人はなぜ恥ずかしがるのか 羞恥と自己イメージの社会心理学 サイエンス社
- 菅原健介 2004 ひとの目に映る自己—印象管理の心理学入門 金子書房
- 角尾美奈 2003 対人不安傾向の再検討—不特定の他者に対する不安傾向と特定の他者に対する不安傾向— 東京家政大学研究紀要, 43(1), 167-173
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路出版
- 和田さゆり 1996 性格特性語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67(1), 61-67

付表 1 自己認知の各項目における選出頻度

素直な	183	頭の回転の速い	107	独創的な	84
親切的な	164	好奇心が強い	106	イライラしない	78
温和な	156	計画性のある	102	几帳面な	65
社交的	150	自己中心的でない	99	独立した	63
寛大な	131	想像力に富んだ	93	美的感覚の鋭い	61
話好き	130	良心的な	92	勤勉な	57
臨機応変な	128	協力的な	92	神経質な	56
積極的な	126	洞察力のある	91	傷つきにくい	55
陽気な	118	くよくよしない	91	ルーズな	51
意思表示のできる	118	心配性	88	弱気な	47
楽観的な	116	外向的	86	無口でない	35
活動的な	110	興味の広い	85	地味な	26

付表 2-1 友人用対人不安因子分析結果

項 目	F 1	F 2	共通性
8 友人に嫌な感じを与えているのではないかと気になる	.808	.103	.664
6 友人に嫌われないかと不安である	.808	.134	.671
7 友人にどう思われているか気がかりである	.800	.088	.648
3 自分の言動が友人を傷つけているのではないかと、不安になる	.759	.078	.583
11 友人にどう思われているかがわからないと不安になる	.718	.143	.537
4 自分の表情や目つきが友人に嫌な感じを与えるのではないかと気になる	.707	.134	.517
9 誤解されているようで不安である	.657	.180	.464
1 友人の顔色が気になる	.616	.152	.402
10 馬鹿なことを言っはしめないかと不安である	.579	.276	.441
21 友人に笑われるのではないかと不安である	.477	.431	.413
2 どもらないかと不安である	.440	.327	.301
18 自分だけがとりのこされたような気がする	.405	.447	.364
<hr/>			
17 私は、人がたくさんいる所で発表するのがこわい	.084	.834	.702
19 ミーティング中に何か提案するとき私は他の人達より落ち着かない気がする	.144	.822	.697
14 会議中に自分の考えを聞かれたとき、私はとても緊張する	.154	.798	.660
13 多くの人の前で原稿を読むとき、私はとても緊張する	.070	.775	.606
16 私は、話し合いの場で自分の意見を述べるのがこわい	.169	.759	.604
20 人前で話すときの緊張感、他の人より私の方が強いと思う	.107	.756	.583
15 思っていることがうまく言えないのではないかと不安である	.302	.675	.547
5 大勢の前で自己紹介するとき、私は他の人達より落ち着かない気がする	.209	.648	.463
12 友人の前に出て何かするとき、私は不安を感じる	.443	.445	.394
<hr/>			
因子の寄与率 (%)	27.13	26.35	
累積寄与率 (%)	27.13	53.48	

付表 2-2 不特定他者用対人不安因子分析結果

項 目	F 1	F 2	F 3	共通性
35 ミーティング中に何か提案するとき、私は他の人達より落ち着かない気がする	.740	.227	.267	.670
8 大勢の前で自己紹介するとき、私は他の人達より落ち着かない気がする	.724	.231	.272	.651
11 人前で話すときの緊張感、他の人より私の方が強いと思う	.720	.237	.197	.613
30 私は、人がたくさんいる所で発表するのがこわい	.706	.160	.467	.742
7 人前で話さねばならないと思う、それだけで恐ろしい	.692	.225	.353	.654
19 私は、話し合いの場で自分の意見を述べるのがこわい	.663	.246	.359	.628
21 会議中に自分の考えを聞かれたとき、私はとても緊張する	.616	.269	.389	.603
1 人前に出て何かするとき、私は不安を感じる	.614	.193	.413	.584
5 多くの人の前で原稿を読むとき、私はとても緊張する	.601	.146	.369	.518
22 大勢の人のいるところでは緊張する	.565	.258	.389	.537
34 人前で顔が赤くなって困る	.482	.144	.145	.274
15 人前に出ると体がふるえる	.475	.202	.375	.407
16 思っていることがうまく言えないのではないかと不安である	.417	.430	.316	.459
<hr/>				
32 人に嫌な感じを与えているのではないかと気になる	.177	.788	.199	.692
13 人に嫌われないかと不安である	.213	.745	.182	.633
17 人にどう思われているか気がかりである	.167	.723	.326	.657
25 人にどう思われているかがわからないと不安になる	.112	.690	.293	.574
9 誤解されているようで不安である	.253	.686	.143	.555
26 人の顔色が気になる	.083	.669	.389	.606
20 自分の言動が人を傷つけているのではないかと、不安になる	.138	.668	.128	.481
33 人に笑われるのではないかと不安である	.254	.654	.239	.550
14 馬鹿なことを言っはしめないかと不安である	.234	.639	.279	.541
3 自分の表情や目つきが相手に嫌な感じを与えるのではないかと気になる	.171	.623	.209	.461
10 自分だけがとりのこされたような気がする	.271	.540	.137	.383
<hr/>				
28 人に見られているのがわかると平静でいられなくなる	.199	.340	.647	.574
27 危険や困難にぶつかると、尻込みしてしまう	.228	.271	.643	.538
2 困難に出会うと、あわてて何もできなくなってしまう	.309	.223	.598	.503
31 人の視線を感じると、落ち着かなくなる	.286	.396	.581	.576
24 人前に出ていくのに自信がない	.563	.195	.535	.642
4 初めてすることには、全然自信がもてない	.300	.299	.449	.381
23 異性と話そうと思うと緊張する	.239	.060	.444	.258
29 どもらないかと不安である	.389	.338	.412	.435
12 緊急のときには落ち着いていられなくなる	.431	.290	.408	.436
18 目上の人に話そうと思うと、すごく緊張する	.408	.194	.359	.333
6 あまりよく知らない人とは、どう付き合っよいかわからず困ってしまう	.295	.252	.324	.255
<hr/>				
因子の寄与率 (%)	19.51	18.93	14.17	
累積寄与率 (%)	19.51	38.43	52.60	